

周辺からの記憶 46

2022 年 双葉町のこと

村本邦子(立命館大学)

1月末、WIMA（早稲田大学災害復興医療人類学）の定例研究会で、早稲田大学の学部生2人が、卒業研究を報告してくれた。福島原発事故後の原発教育の実態や課題についてである。「大熊町立学び舎ゆめの森」の校長、「ふたば未来学園」で原子力防災・伝承探求ゼミを担当している先生、福島県の小中学校の先生たちにインタビューしたもので、とても興味深い内容だった。おそらく若い学部生だからこそ聞くことのできた内容だろうと思われる。

「学び舎ゆめの森」は、大熊町立のふたつの小学校と中学校を統合させ、2024年4月にできた。認定こども園、預かり保育、学童保育の側面を持ち、0歳から15歳の子どもたち39名が通っている。クラスルームも時間割もなく、子どもたち自身が学習進度を決める。およそ6割が県外からの移住者で、学校の敷地外はまだ線量が高いため、子どもたちはdoor to doorのスクールバスで通学しているという。

「ふたばみらい学園」は、双葉郡の5校が廃校になり、2015年、広野町に新たに設立された。中学6学級（179名）、高校15クラス（450名）で、計21クラス629名が在籍している。6つのゼミがあって、そのうちひとつが原子力伝承ゼミである。子どもたちは自由に活動し、コンピューターゲームでイチエフを作ってみたり、廃炉はできるのかについてさまざまな立場の人を呼んで座談会をしたりする生徒がいるそうだ。

福島県の小学校で教えながら、あちこちで哲学カフェをしている先生によると、原発事故の被災地では他の地域とずいぶん様子が違って「生きるとはどういうことか」が話題に出ると言う。また、復興が進められている裏で被災世代の子どもたちは落ち着きがなく、事故時の大人たちに余裕がない状況で育ち、現在も教員に子どもたちを十分サポートする余裕がなく、「ただ子どもたちの頭を撫でて話を聴いてやりたい」という言葉が印象に残った。

私も先生たちの話を聴かせてもらったなと思い出しながら、今回の記録をまとめた。



双葉町を訪れて

双葉町では、いよいよ 2022 年 9 月 1 日から帰還が開始された。9 月 5 日、駅前の新築町役場庁舎を訪れたが、100 人の職員が戻って働いているそうだ。帰還所帯数は 2 家族だという。駅前に新しく建てられた住宅ゾーンには、順次住民が戻ってきたり、他県からの新規移住者がある予定らしい。9 月 3 日に交流したみやぎ民話の会会員で、元双葉町民の目黒とみ子さんが、いわきにある双葉小中学校を訪ねて欲しいと提案してくださった。また、双葉町役場いわき事務所秘書広報課の A さんを紹介してくれた。せっかくなので 1 年先まで待つよりはと、9 月 6 日のプロジェクト終了後に足を延ばした。

まずは、双葉町役場いわき事務所へ。A さんは元保育士で、目黒さんの娘さんの担任だった。それ以来のおつきあいだそうだ。A さんによれば、双葉には 70 人ほどが戻っており、リニューアルオープンした双葉町役場には百人の職員がいるという。帰還困難区域（住民しか入れないところ）も案内できると言ってくださり、貴重な資料を頂いた。双葉町が制作した『ありがとうメッセージ』（2020 年）と『双葉町 東日本大震災記録誌 後世に伝える震災・原発事故』（2017 年初版、2021 年第二刷）である。せっかくなので、この 2 冊をもとに双葉町の東日本大震災の状況をまとめてみる。

私たちのプロジェクトでは、立ち入り禁止区域に入ることはしてこなかったのですが、双葉町について話としては知っていても、

直接訪れて具体的イメージが持てるようになったのは、大震災から 9 年が経過し、双葉町の一部区域で避難指示が解除され、特定復興再生拠点を含む当該区域内に自由に立ち入りできるようになって以降である。初めて行ったのは、2020 年 9 月 20 日に原子力災害復興伝承館がオープンし、9 月 24 日だった。





双葉町の東日本大震災

震災前の双葉町

双葉町は福島県沿岸部のほぼ中央に位置し、東に太平洋、西に阿武隈山系をのぞむ海と山に抱かれた自然豊かな町だった。2011年3月11日時点での人口は7,140人、町の面積は51.42平方キロメートル、比較的温暖で冬でも積雪は少なく恵まれた環境である。地域のつながりが強く、夏に行われる盆踊りは17に分かれた行政区単位で開催され、お囃子は地区によって微妙な違いがあるという。

双葉町のダルマ市は江戸時代から伝わる新春恒例の伝統行事で、毎年1月の第2土曜日と日曜日にダルマ市が開かれた。今年の運勢を占う巨大ダルマ引き合戦も行われた。当時のJAふたば女性部双葉支部ダルマ部会の会員がデザインし、30年ほど前から作り始めた双葉町のダルマもある。このダルマ市では、初発神社境内で奉納神楽大会が開かれていた。また、双葉町の同好の士が集まり、1992年に結成された標葉（しねは）せんだん太鼓保存会は、週2回の練習を欠かさず太鼓を打ち、県内はもちろん全国各地のイベントで演奏してきた。

「相馬野馬追」標葉郷は浪江・双葉・大熊の3町で構成され、妙見小高神社に奉納している。

巨大地震と津波の襲来

3月11日午後2時46分、巨大地震によって震度6強の激しい揺れを観測、多くの家屋が倒壊し、道路はいたるところで寸断されるなど、大きな被害を受けた。さらに、地震発生から1時間後、沿岸部に15メートルを越える津波が押し寄せ、建物や農地を呑み込んだ。注文洋服店を営んでいた（元）消防団長釘野雄一さんは店舗が倒壊し動けなくなったが、周囲の協力で助け出され、治療も受けず無我夢中で消防団活動を行った。地域の基幹病院である双葉厚生病院には怪我人が運び込まれた。病院の建物も被害を受けたが、停電は免れ、残された機能を駆使して医療活動を継続した。夕方から夜にかけ津波に呑み込まれた人が次々に救急搬送されてきた。時間が経つにつれ重傷者が運び込まれた。トリアージを行い、朝までに60人の治療を行った。DMAT（災害派遣医療チーム）の支援で、夜中、陸路で転院搬送し、夜明けを待って防災ヘリコプターと防災ヘリで緊急搬送した。死者20人、不明1人、奇跡の生還を遂げた町民もいた。

学校や公民館に避難所が設けられ、3月11日22時45分現在で、双葉中に600人、双葉北小に700人、ヘルスケアふたばに280人、町役場に118人、各地区の公民館も解放され、避難する町民は約2,500人となった。原発事故までに町民の1/3が避難所に駆け込んでいたことになる。

東京第一原子力発電所の事故と避難勧告

大規模な地震と津波により、双葉町と大熊町にまたがる東京第一原子力発電所では、1号機から4号機の浸水高は11.5メートルから15.5メートルに達し、非常用ディーゼル発電機が水没し、「全電源喪失」という最悪の事態になり、原子炉を冷却する機能を失った。

3月11日19時3分、政府は「原子力緊急事態宣言」を発令し、20時50分、福島第一原発から2キロ圏内の避難、21時23分、3キロ圏内の避難、3~10キロ圏内の屋内避難を指示した。翌日の3月12日5時44分には、1号機の中央制御室で放射線量が上昇し、避難指示は10キロ圏内に拡大した。9時過ぎ、1号機の原子炉格納容器内の圧力が上昇したため、放射性物質含む気体を逃す「ベント」操作が開始された。15時36分、1号機の水素爆発、18時25分にはさらに半径20キロ圏内に拡大して住民に避難指示が出された。

14日には3号機が水素爆発、15日には衝撃と振動が起き、2号機で圧力抑制室の圧力計の数値がゼロを示し、経済産業省原子力安全・保安院は「放射性物質が漏洩する恐れがある」と発表した。15日は4号機で原子力建屋が大きく損傷していることが確認され、その後、出火していることが確認された。一連の事故で、大量の放射性物質が大気中や海に放出された。4月12日、経済産業省原子力安全・保安院は、事故の深刻度をINES（国際原子力事象評価尺度）の暫定評価で、チェルノブイリ原発事故に匹敵する最悪の「レベル7」に相当すると発表した。

井戸川町長と川俣町への避難指示

地震が起こった時、井戸川克隆（元）町長は、富岡町に出張中で、双葉地方会館から出たところで強い揺れに襲われた。町長は過去に福島第一原発2号機の格納容器組み立て現場にいたことがあり、当時、頻繁にトラブルが起き心配していた。国道6号が混み始めた頃、「浜街道」を通り、急いで双葉町に帰った。11日16時27分、災害対策本部を開いた。避難所回りをしていたところに、郡山地区の住民がいて、2キロ避難指示が出ていたことを知った。

12日の朝までに災害対策本部会議を5回ほど開いていたが、朝5時、被害状況の確認、各避難所への職員の割り振りなど協議した後、役場の外に大勢の自衛隊員、警察官と関係車両がたくさんあり、総務課長は「これは何事か」と思ったという。半径3キロ圏内に避難指示、3~10キロ圏内に屋内避難指示が出ていたが、それ以上に重大なのではと感じ、原子力担当の企画課長に問い合わせても、東電などから連絡はないという返事だった。

政府は、その後、朝の5時44分に10キロ圏内の住民に避難指示を出した。この時点で、双葉町には何の連絡もなく、井戸川町長は6時過ぎ、役場にあるテレビのニュースでこれを知った。10キロ圏内は町民全員が該当する。役場は騒然となった。それまでの避難訓練では3キロ圏内避難指示のシナリオしかなかった。

朝から風向きを見ていた町長は、原発から50キロ離れた川俣町への避難を決め、川俣町長の了解を得た。7時30分には災害対策本部会議で最終確認し、7時40分頃から、

町防災無線と役場庁舎内に広報を実施した。川俣町への避難は町民がそれぞれマイカーで行くよう判断し、通行可能な道路や避難ルートを広報した。国が手配したバスのうち5~6台が役場に來た。2~3台をヘルスケアふたばへ、残り2台を双葉北小から県警の防護車で町民約100人が避難していた浪江町の荊野小学校に向かわせた。しかし、地域によっては防災無線が聞こえないところもあり、情報も錯綜した。正午頃、海から双葉町役場の方に風が吹き、13時頃には原発からの風が吹き始め、線量計の数値が急上昇し、14時頃、町長は役場の閉鎖を指示して最終的な退避命令を出した。

3月13日6時現在、福島県警災害対策本部によると、原発10キロ圏内の施設に約250人が残っていた。自衛隊のヘリコプターなどで順次、区域外への搬送を進めたが、病人や高齢者の搬送は当然ながら容易ではなかった。双葉町社会福祉協議会事務局長の井上一芳さんの証言によれば、ヘルスケアふたばの避難者200人が避難した後、社協職員とデイサービス利用者約50人が残ってしまい、被爆のリスクを考えて、年齢の低い職員を帰らせた。正午過ぎ、双葉高校にヘリが来ていると聞き、50人のうち介護度の高い15人を職員とともに向かわせた。15時36分、水素爆発し、まるで雪が降ってくるように、社協の建物は爆発の社屋片と見られるごみに覆われた。線量計の針は振り切れた。その後は、屋外に出ないようにしたが、南東の風が西風に変わると、わたごみはいつのまにか飛ばされていた。「ここでは駄目だ」ということで、社協と町のバスを使って、16時過ぎに全員で川俣へ向かった。井上さんは、避難

指示の内容が十分にわからないまま、建物内での待機中に被曝させてしまったことが残念でならないと言っている。

双葉厚生病院でも、緊急事態宣言や避難指示が出された後も、通報はなく、大半の職員は何も知らないまま12日の朝を迎えた。重症患者への診療体制を検討していると、防護服を着た警察官がやってきて、詳細な説明はないまま避難勧告が出された。自力移動可能な患者から避難させるが、屋内退避の指示で中断され、正午過ぎに再開されて、ようやく13時20分すぎにはバスによる避難が完了した。病院内には職員56人と重症患者や寝たきり患者40人が残った。県の対策本部から連絡が入り、ヘリコプター搬送のため自衛隊車両が重症患者の搬送を始めた。それぞれがバスやヘリでバラバラに移動し、他の人々がどこへ向かったのかわからないまま、職員は安否確認に奔走した。全員の安否が確認されたのは16日で、避難先は青森から九州まで全国に広がっていた。入院患者のカルテ程度しか持ち出せなかったため、3月24日、4月18日に双葉町に戻り、重要な書類や使用可能な機器を持ち出した。病院の職員は避難者受入れのあちこちの病院に分散して勤務した。



埼玉県への避難

3月14日、3号機が水素爆発し、川俣町に避難していた井戸川町長の線量計の数値が上がった。川俣町の避難所は7ヶ所あり、待遇が違ふと苦情も出ていた。町民も職員も疲れていた。「ただちに影響はない」と繰り返す国への苛立ちもあり、町長は新しい避難所を複数探すとは断で決めた。知人の情報網を活用し、町民を放射能から守り、まとまった場所で一緒に避難できる環境を確保することを目的に、埼玉県への再避難を決断した。人口の多い地域の方が、ボランティアや物品などの支援も受けやすいとも考えた。18日に災害対策本部会議で協議した後、町長は自分のパソコンで町民へのメッセージを送った。3月19日、川俣町へ避難していた町民4,000人のうち約1,200人がバス40台でさいたま市にあるスーパーアリーナへ移動した。埼玉県知事、さいたま市長に迎えられ、スーパーアリーナの使用は3月31日までで、その後は加須市の旧騎西高校を準備しているという説明を受けた。スーパーアリーナでは大勢のボランティアの支援を受けつつも、厳しい避難生活が続いた。

3月20日、スーパーアリーナに役場機能を設け、20日から安否確認など24時間体制で相談受付を開始した。22日、町長は次の避難所となる騎西高校を視察し、これを評価、23日の町議会協議会全員で了承した。3月30日、31日にはスーパーアリーナから埼玉県加須市の旧騎西高校に避難した。ここには最大1,400人が暮らし混雑を極めたが、町民自ら共同生活のルールを作った。一方で、県内に留まりたいと県内への避難を希望した町民も多く、双葉町から西に百キロ離れた猪

苗代町にある「ホテルリステル猪苗代」が福島県内の避難場所となり、約800人が避難した。県外に自治体が設けた避難所に身を寄せたり、親族・知人を頼って自力で避難場所を確保した町民もいた。双葉町は7,140人の全町民が避難した。

4月20日、避難指示が出ている半径20キロ圏内について、立ち入りを禁じる警戒区域に指定する方針が決まり、21日、一時帰宅の条件が決まった。一時帰宅は2時間以内、1家族1人だけだった。4月25日、福島県警は第一原発から5キロ圏内となる浜通りの行方不明者の集中捜索を始めた。5月26日、20キロ圏内の初めての町民の一時帰宅が始まった。

町は、広報ふたば「災害版」を6月1日付けで発行した。町民から「見捨てられていないと嬉しかった」と感謝の声が寄せられ、2012年1月号からは従来の情報量となり、2013年5月号からは町民の近況を聞き書きした「ふるさと絆通信」が始まっている。

役場と学校をいわき市へ

2011年6月からは県内9ヵ所に応急仮設住宅の建築が始められ、借り上げ住宅も設けられた。9月30日、第二次避難所として使われていたリステル猪苗代の避難所が閉鎖された。残っていた120人は、白河市内などの仮設住宅や郡山市などの借上住宅町に移動した。町は、役場本体機能がある埼玉支所のほかに、福島県内に町民を支える拠点として、2011年10月28日に郡山市に「双葉町福島支所」を設置した。なお、旧騎西高校の避難所が閉鎖されたのは、最後まで生活していた

町民が借上住宅に移った 2013 年 12 月 27 日だった。

2013 年 2 月 13 日、町は国から避難区域の区域再編についての説明を受け、双葉町の 96%を帰還困難区域、4%を避難指示解除準備区域とする案を示した。前日の 2 月 12 日、井戸川町長が退任し、井上一芳副町長が代理者となり、3 月 10 日伊澤史朗氏が町長となった。その後、役場本体機能を福島県内に移転することが決まり、2013 年 6 月 17 日、いわき市に新築の仮庁舎「双葉町いわき事務所」を開所した。埼玉県加須市の旧騎西高校は、役場本体機能移転後も避難所として利用され、2013 年 12 月 27 日にその役目を終えた。応急仮設住宅等への住居移行は避難の長期化を示唆し、町民に様々な負担がかかった。町も、除染や賠償、学校再開などのほか、双葉町外での町政を進めるための調整や各地に散り散りになった町民への情報伝達など多くの課題に直面した。

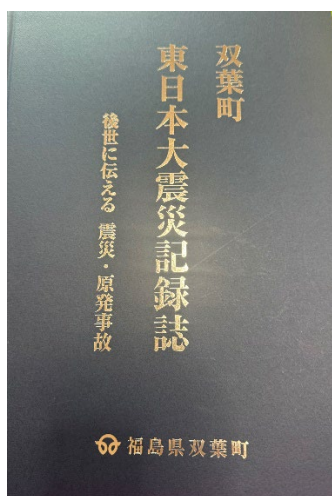
2014 年 4 月、いわき市錦町の旧東邦銀行上田支店西木出張所内の仮校舎で町立幼稚園と小中学校が再開されることになり、双葉南小 7 人、双葉北小 3 人、双葉中 8 人、双葉幼稚園 2 人の計 20 人が人事異動で着任した。4 月 7 日の入学・入園式はいわき市勿来市民会館で行われ、園児 1 人、小学生 4 人、中学生 6 人の計 11 人が臨んだ。みな、避難先の学校に通っていたが、3 年ぶりの再開となった。仮校舎は 8 月 25 日に完成した。なお、双葉高校は 2012 年 4 月よりいわき明星大学に仮校舎を置き、2013 年 10 月 12 日創立 90 周年を祝ったが、いていたが、生徒数減少のため 2017 年 3 月で休校となった。

復興に向けて

2015 年、町復興推進委員会が町民の生活再建と町の復興に向けた最終報告をまとめた。3 月 1 日に常磐自動車道常磐富岡-浪江 IC 間 14.3 キロが開通し、埼玉県と宮城県を結ぶ総延長 300.4 キロの前線がつながった。5 月 20 日、環境省による本格除染が始まり、2016 年 11 月 25 日、福島第一原発事故で出た県内の除染廃棄物を保管する中間貯蔵施設の本体工事に着手した。中間貯蔵施設は双葉・大熊両町にまたがる第一原発を囲む訳 1,600 ヘクタールの敷地に建設し、最大で役 2,200 万平方メートルの廃棄物を保管する。中間貯蔵施設の建設については、2013 年 8 月に県が受け入れを容認、12 月に大熊町が、2014 年 1 月に双葉町が受け入れを容認した。2016 年 12 月末現在で、地権者 2,365 人のうち土地の売却や地上権の設定に合意したのは 580 人、契約済みの面積は予定地の 15.6%、環境省は担当職員を増やして交渉に当たっているという。なお、新聞報道によれば、環境省は汚染土の保管に必要な用地の確保にめどがついたとし、地権者との買収交渉を 2021 年 3 月末で原則終了する方針を固めた（読売新聞オンライン 2020/12/11 <https://www.yomiuri.co.jp/national/20201211-OYT1T50123/>）。

東日本大震災から約 9 年が経過した 2020 年 3 月 4 日午前 0 時、双葉町の一部区域で避難指示が解除され、特定復興再生拠点を含む当該区域内に自由に立ち入りできるようになった。3 月 7 日には、常磐自動車道・常磐双葉インターチェンジが開通、3 月 14 日には J R 常磐線双葉駅が営業再開した。さらに、就労者向けの福祉厚生施設を兼ね備え

た「双葉町産業交流センター」と「東日本大震災・原子力災害伝承館」がオープンし、「復興祈念公園」が整備されつつある。一方で、中間貯蔵施設の整備エリアに該当し帰る家がなくなってしまう町民や、いまだ復興計画が示されておらず帰還の見通しが立たない、拠点外の帰還困難区域の町民もいる。



双葉小中学校を訪れて

子どもたちの暮らし

その後、双葉小中学校を訪問した。中学のX校長は、中学生を連れてちょうど避難解除された双葉に行っておられるとのこと。初めは、双葉町立双葉南・北小学校Y校長がお話してくださった。現在、中学校在籍生徒は9名、小学校在籍児は29名という現状である。いちばん長くスクールバスに乗っている子は片道1時間かけて来る。地元に戻った学校でも、避難先から通学していたりするので、震災後、双葉郡の学校では結構そういうところがあった。ク

ラブ活動などは難しく、双葉中学校ではバトミントン部だけある。

避難暮らしが長引き、多くの子どもたちは双葉町で生活したことがない。自分たちの故郷は双葉町だと頭ではわかっているも、子どもたちにとっては今住んでるところが自分の故郷かもしれない。大人にとっては、どうしても避難しているという意識が強く、感情的には、避難させられているという気持ち強い。そのため、現住所をいわきに転出する人もいないわけではないが、それほど多くない。

子どもたちの交友については、学校の友達はバラバラ、地元の子との関わりも学校以外ではあまりない。中学校を卒業した子どもたちは、この地域で高校進学や進路選択をする。双葉郡に5校くらいあった高校はすべて休校になっている。いわき市の隣が双葉郡で、一番近い広野町にふたば未来学園高校ができたので、そこに行く子どもはいる。双葉郡はどの学校も子どもの人数が減っている。

双葉の現状としては、帰れるのか、帰って生活できるのか、役場だけは立派にできたけれど、そこで生活が成り立つかという問題がある。店もなければ病院もない。学校もない。そういったところにコミュニティが成り立つかというのは厳しいと思う、

子どもたちに双葉のことについても知って欲しいが、やはり年数が経ち、教員の記憶も薄れてきているし、双葉郡出身の教員だけではなく、いわき市の教員もいる。震災で原発事故と避難を経験している人はだんだんと少なくなっている。そういうことを伝えていくには学習しかない。X校長は

双葉出身なので、自分の役割だと思っているとのことだった。

初めての双葉町訪問

そうこうするうちに、双葉から帰って来た中学の Y 校長が合流してくれた。帰還制限が解かれ、今日はオープンしたばかりの双葉町役場や学校に中学生たちを連れて行ってきた。双葉中学出身の教員がいて、本人自身も震災後帰ったのは初めてで、驚いていた。人にもよるが、震災後一度も家に帰っていない人も多い。その教員は家を更地にした。以前は年に回数を決められてしか入れなかったし、防護服が必要だったり、15 歳以下は駄目など年齢制限があったりして、簡単に行って見てみようかというような状況ではなかった。

今日は中学生全員を連れて行き、1 キロぐらい駅周辺をぐるっと足で歩かせた。双葉出身の教員がいろいろ説明すると、子どもたちが一番反応したのはやはり学校だった。「ここに自分たちがいたかもしれないよね」という感覚だろう。学校では、その当時の掲示物がそのままあり、X 先生の娘さんのスケッチブックもあって、写真を撮ってきた。「ああ、ここでガーッときたんだ」「これ音楽が何かやってたのかな」「校庭にここからこう行って逃げたんだね」と子どもたちは想像を膨らませ、興味深々で、はしゃいでいた。

一方で、双葉中出身の教員は「うわー」とか「ここだー」とか「昔、先生に見つからないように、ここに掘ったんだ」など一言一言が重かった。音楽の教員がいきなりピアノで校歌を弾き始めたら、子どもらが歌った。行って良かったなと思った。やはり、映像とは

大違いで、目で見ても、感じて、臭い感がある。カビ臭いとか。「どうなったかな」と教員が何気なく家庭科室の冷蔵庫を開けたら、開けなければよかったと思っても時すでに遅し、もう凄まじい臭いが一瞬で充満した。

11 年経っているので、天井は落ちていたし、地震の影響や建物が風化して、地震で建物にそれほど被害ないようでも、地盤沈下して傾いているなどある。ガラスとかそういったものは多少整理されていた。

これから学校で、こういう行事を定期的に入れるかと教員と喋りながら帰って来た。現状、1 年後どれだけ進んだかという視点で持っていていいし、1 年生の女の子が「働きたい」とか「将来住んでもいいかな」とボロッと言ったが、職場体験をさせてもいいかもしれない。

X 校長は、「将来的には子どもたちと電車で行きたいと思っている。電車の景色も見える。今日中学生が行った中学校の校舎、私は第 1 期生で入っている」とのこと。Y 校長は、外部の出身なので、今回行ってみて、300 人足らずの生徒数でこれだけ教育にお金かけるんだなと圧倒されたという。体育館でバスケット 2 面とれて、ギャラリーもあり、それとは別に 2 階建ての武道館があって、中学校の 50m プールもある。

「まだまだですね。歩いてみて。これは住めない。住むっていう決断をしたの、進むっていう決断した人はすごいと思う。町長さんもやっぱり言ってましたね。本当にスタートラインに立った、スタートしたんじゃない、立ったという感じ」。学校に関してはまだ何も示されていない。町作りの第 3 次計画では、出された時には 2030 年に 2000 人が

戻ってくるのを想定して、帰還者はどういう人だとなると、ファミリーという言葉が初めてそこに出てきている。つまり、そこには子どももいる。2030年、どうなっているのか。町長さんとの話は、やはり将来ここに住んでという話になってしまうところがあって、ふるさと教育総合学習、探究的な学び、何で進めようか、テーマにどれだけ時間かけてやるかなど。地元の方、実際に町に戻って頑張られている方のお話を聞く機会は多くなった。それでも、子どもたちにとっては自分ごとにするのは難しい。だから、今日みたいに、現地に行ってみせて、感じて、「将来住んでもいいかな」という言葉を聞いただけで大成功だと思う。



課題としてあること

小学校の新入学はあるが、今年は3人。一番多い学年で7人。教員は小学校は2つ合わせて20名、中学は11名、移動もあるから、思いもだんだんバラバラで、それも課題になっていくと思う。

案外そういう機会が多く設定されているので大人とはしゃべれるが、中学生同士のコミュニティがない。いわき市の中学生との交流も、塾で何人かと会うというくらい。先日、小名浜にイオンができて、子どもたちが連絡取り合って、「何時にあそこに行こうよ」と言っているのを聞いて嬉しくなった。普通のことなのに、ここに来て2年目になるが、そんな話はこれまで聞いたことがなかった。卒業して高校に行くと、うまく馴染めるのか心配している。去年の卒業生は1人で、たとえば成人式の時、他に誰もいない。そんなことも心配になる。当時中学生とか思春期だった子どもが大人になって、ある程度の年齢になっても苦労している子がいる。環境の変化に馴染めないとか、自分の存在意義は何なのかとか、なんでここにいるんだとか、まだ心の整理がつかないというような方は結構いるように感じる。

放射線に関しては、一時期よりは怖さとかは下火になってきている。毎年中学校では専門の方が来て放射線教育がある。だから、大人の方が不安があるかもしれない。親御さんも心配かもしれないが、県の検査は何回も来る。ここにいる間はここにいる中で何ができるか、戻ったら戻ったで、そういう教育も必要かもしれない。

大変な状況下を生き抜き、いまだに何も解決せず、課題が山積みになってしまっている双葉の子どもたちや家族のことを考えると、起きたことのあまりの酷さに胸が痛む。先生方の子どもたちへの暖かいまなざしには救われる思いがした。しかし、先生たちも人事異動でいつまでいるかわからない状態である。

双葉町役場の HP を見ていると、「広報ふたば」に子どもたちの双葉訪問の記事が出ているのを見つけた。

● 9月6日と7日、町立双葉中学校の生徒9人が町内で校外学習を行いました。6日は、J R 双葉駅東側地区を歩いて見学し、役場新庁舎では伊澤史朗町長と懇談の時間が設けられました。双葉中学校にも訪れ、震災から11年以上が経過した学校の状況を肌で感じていました。7日には、浪江町立請戸小学校、東日本大震災・原子力災害伝承館及び産業交流センターを見学しました。今回の校外学習は、「双葉町のいま～町に行って知ること、感じること、学ぶこと」をテーマとした総合的な学習の時間の一環で行われ、生徒たちはこれまでの調べ学習と今回の校外学習を基にまとめの学習をし、10月には町立学校で行われる梅檀祭で、12月にはふるさと創造学サミットで学習の成果を発表する予定です。（広報ふたば 2022 年 10 月災害版 N0.137）

● 9月6日、双葉中学校の生徒9人は校長先生はじめ教職員9人の引率により校外学習として双葉町を訪れました。掲げたテーマは「双葉町のいま～町に行って知ること、感じること、学ぶこと」、そして、復興の現状を知り、町に対する思いやこれからの自分の生き方を考える機会とすることを目的として実施されました。生徒の皆さんと先生方が応接室に通され、伊澤町長から歓迎の言葉と双葉町の復興についてお話しをいただきました。何よりも伊澤町長の満面の笑顔が印象に残りました。生徒たちの輝く眼差しを見て、町の将来への興味・関心の高さが伝わってきたからだと思います。役場の業務や、町西側に展開する住宅ゾーンについて質問があり、伊澤町長から丁寧に説明いただきました。その後は、双葉中学校の校舎内も見学。音楽室では、音楽科教諭のピアノ伴奏で校歌を全員で歌い感激したと担当職員より聞きました。2日目は、浪江町立請戸小学校や東日本大震災・原子力災害伝承館、産業交流センターでの学習で、大変有意義な校外学習になりました。ふたばプロジェクトの職員にアテンドいただき、貴重な学びを体験できました。ありがとうございました。（広報ふたば 2022 年 10 月災害版 N0.137）

その後、小学生たちも双葉町を訪れたようだ。

9月29日、双葉南・北小学校の5、6年生13人が見学学習で町内を訪れました。児童たちは、産業交流センターおよび東日本大震災・原子力災害伝承館を見学し、役場新庁舎では平岩弘副町長から町の状況等について説明を聞きました。その後、職員の案内により新庁舎内とJR双葉駅西側に整備中の駅西住宅を見学し、庁舎の特徴や各課の業務内容、駅西住宅の整備状況等について資料と見比べながら説明に熱心に耳を傾けました。今回の見学学習で学んだ内容は、12月に開催されるふるさと創造学サミットで発表する予定です。（広報ふたば2022年11月災害版N0.138）

井戸川裁判

井戸川克隆（元）町長のその後である。町民を被曝から守るために200キロ以上離れた埼玉県に住民を避難させた2年後の2012年12月町議会によって不信任決議案を可決され、町長を辞職している。放射能汚染をなかったことのように進む福島復興に抗い、避難指示区域の再編、中間指針、中間貯蔵施設といった政府の方針を「受け入れる理由がない」と拒んだためである。さらに漫画『美味しんぼ』誌上で

「鼻血の原因は被曝」と話したため、猛烈なバッシングに遭い、メディアからその名前は消えた。

井戸川は、2015年、「当時町長だった立場からしか訴えられないことがある」と、一人で国と東京電力ホールディングスを相手取り、東京地裁に損害賠償訴訟を提訴した。周囲から人は離れ、2度にわたり弁護士とも離別した。最高裁判所は2022年6月、原発事故被害者の集団訴訟について国の責任を認めない判決を下した。ますます四面楚歌の様相を呈している。（福島原発事故、「現代の田中正造」は何を訴える1審だけで9年、「井戸川裁判」傍聴記 東洋経済 ONLINE 2024.10.24.,25

<https://toyokeizai.net/articles/-/835100>)

とは言え、先に紹介した町の記録集に記録されている井戸川の姿勢には元町長に対する敬意が強く感じられるものであった。



つづ